夕刊フジ　2022年9月10日（9日発行）

ニッポン ドクター和の 臨終図巻

㉑京セラ創業者　稲盛和夫氏

御自宅で亡くなられたことに驚き

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

僕はこの夏、27年前に開業したクリニックの院長職を辞し、名誉院長に就任しました。これまでは、医師や看護師や事務職など100人以上のスタッフを統率する立場でもあり、医者であるとともに常に中小企業のリーダーとしての役割も担っていましたから、少々肩の荷が下りてホッとしてもいます。

リーダーとして何をするべきか？　いつも指針となってくれたのが、この偉大な経営者の書物でした。27歳で京セラを創業し日本有数のメーカーに成長させ、その後もKDDIの設立、JALの再建など、「平成の経営の神様」と呼ばれた稲盛和夫さんが、8月24日、京都市内の自宅で亡くなりました。享年90。死因は、老衰との発表です。

稲盛さんの訃報を知り、まず驚いたのが、御自宅で亡くなられたということです。

僕が今から10年前、『平穏死10の条件』という本を出版した際、自宅で息を引き取ることはまだ難しい時代でした。しかも、お金持ちの経営者や、著名人であればあるほど、自宅での平穏死は叶わなかった。「立派なこの人を、何がなんでも生かしておかなければならない」と、（本人ではなく）周囲が延命治療を強く望むからです。それは病院の医師も同じで、「この人を死なせたら大変なことになる」というプレッシャーから、最期まで濃厚な治療に走りがち。エライ人ほど、穏やかに死ねないのが現実です。病院の特別室で、管だらけになり点滴でむくんだ御顔のリーダーを、親戚や会社の幹部らが沈黙して取り囲んでいる…そんな光景に何度か立ち合った経験があります。彼らは一体、リーダーの死を待っていたのか、拒否していたのか。

たくさんの人がかかわっていても、この人は本当は孤独な人生だったのだろうなと感じる死もありました。

だから、稲盛さんほどの世界的著名人が、老衰で自宅で穏やかに亡くなったということに、僕は隔世の感を禁じ得ません。あるいは、御本人がしっかりとリビング・ウイルを表明していた可能性もあります。

稲盛さんの著書を読むと、その考えにはいつも仏教的思想が沈殿していたことがわかります。

「リーダーは、常に謙虚であれ」

「成功に近道などありえない」

「人の明暗を分かつものは、運不運ではなく心のもちようだ」

「世のため人のために尽くすのが人生の目的。才能を自分のために使ってはならない」

私も肩の荷が少し下りた分、さらなる利他の心を持って、少しでも稲盛哲学に近づけるよう精進したいと思います。